

た。検査時間は男平均5分50秒、女平均7分55秒と2分間検査時間が長くなっている。女性が長いのは子宮・卵巣と乳腺のためである。

発見された悪性病変は、上腹部において腎癌1例、下腹部で膀胱後部の悪性リンパ腫1例であったが、乳腺では乳癌手術例2例、疑い3例。甲状腺では甲状腺癌5例、癌の疑いで手術待機中が9例であった。

以上の結果から人間ドックの超音波検査に際して、上腹部の検査のみでなく、下腹部からさらに乳腺・甲状腺の検査がおこなわれるべきであると考え。

今後さらに症例を重ねて、その必要性を主張していきたい。

14) 小児胆道疾患の超音波診断

—先天性胆道閉鎖症と乳児肝炎との鑑別について—

湯川 貴男・三浦 努 (三之町病院放射線科)

【目的】小児胆道疾患を超音波所見で鑑別できるか否かを検討する。【対象】ERCPにて診断の確定した先天性胆道閉鎖症4例と乳児肝炎2例を対象として検討した。

【方法】対象とした症例に2回の超音波検査(1回目は外来、2回目は禁食後3~4時間後)を施行し、その胆嚢の所見を正常大、小さい、同定不可能の3段階で評価した。【結果】先天性胆道閉鎖症の4例では2回の検査でいずれも小さいと同定不可能の組み合わせで、乳児肝炎の2例ではいずれも2回目の検査、すなわち禁食の条件で正常大と評価された。【結論】先天性胆道閉鎖症と乳児肝炎との鑑別には禁食の条件での超音波所見が有用であった。鑑別の要点は胆嚢の所見であり、先天性胆道閉鎖症では同定不可能または小さいとなり、乳児肝炎では正常大であった。

15) 胆嚢癌の CT 分類と予後

佐藤 敏輝・松月 由子 (長岡中央総合病院放射線科)
原 敬治

〈目的〉幅広い像を呈する胆嚢癌 CT 所見を分類し予後との関連について検討する。

〈対象〉1989.1月~1993.6月まで当科で CT の施行された胆嚢癌55例を対象にした。

〈方法〉CT 像を限局隆起型、壁肥厚型、広範進展型の3つに分類し、予後との関連を検討した。

〈結果と考察〉頻度は限局隆起型4例(7.3%)、壁肥厚型10例(18.1%)、広範進展型41例(74.6%)であった。切除率は限局隆起型100%、壁肥厚型50%、広範進展型0%であった。予後は限局隆起型が全例再発なく生存中(最長35ヶ月)であるのに対して、壁肥厚型、広範進展型は中間生存期間がそれぞれ4ヶ月、2ヶ月と極めて不良であった。CT 像から胆嚢癌の予後がある程度推定可能であると考えられた。

16) 脾腫瘍性病変の CT

近藤まり子・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
椎名 真 (県立がんセンター放射線科)
捧 彰 (三条済生会病院内科)
斎藤 明 (県立新発田病院放射線科)

我々が経験した39症例の脾病変について文献的考察を加えて報告します。

対象は、CT で局在診断のなされた39症例でその内訳は、悪性リンパ腫7例、転移性腫瘍6例、血管腫1例、リンパ管腫1例、膿瘍5例、梗塞9例、のう胞6例、サルコイドーシス1例です。

悪性リンパ腫の5例、転移性腫瘍の2例、血管腫の1例、リンパ管腫の1例、膿瘍の2例、梗塞の1例、は手術もしくは剖検で病理組織学的診断がついています。その他の例では症状および経過から臨床的に診断しました。

17) 成人 Wilms 腫瘍 2 例の画像診断

仲村 明恒・岡田 稔
道野慎太郎・楠田 順子
高山 誠・蜂屋 順一
古屋 儀郎 (杏林大学放射線科)

Wilms 腫瘍が成人に発生するのは比較的稀とされているが、今回我々は成人型 Wilms 腫瘍の2例を経験したので、その画像診断を中心に報告した。症例は35歳と44歳の男性、主訴はそれぞれ血尿、右側腹部痛。DIPでは腎盂腎杯の圧排像や描出不良が認められた。CTで1例は腎門部から腎外に突出する腫瘍としてみられ、もう1例は中心部から辺縁部に不整に広がる低吸収域としてみられた。MRIは1例に施行し冠状断でのdynamic MRIが腫瘍の肉眼像とよく相関していた。血管造影では2例とも比較的hypovascularで、Wilms腫瘍に特徴的といわれる所見は認められなかった。1例で腫瘍の